

國朝詩人卷傳 第一集 六

22  
25  
15

東 京 圖 書 館

二 五 冊	六 號	三 架	二 六 函	小 說 類	和 書 門
-------------	--------	--------	-------------	-------------	-------------

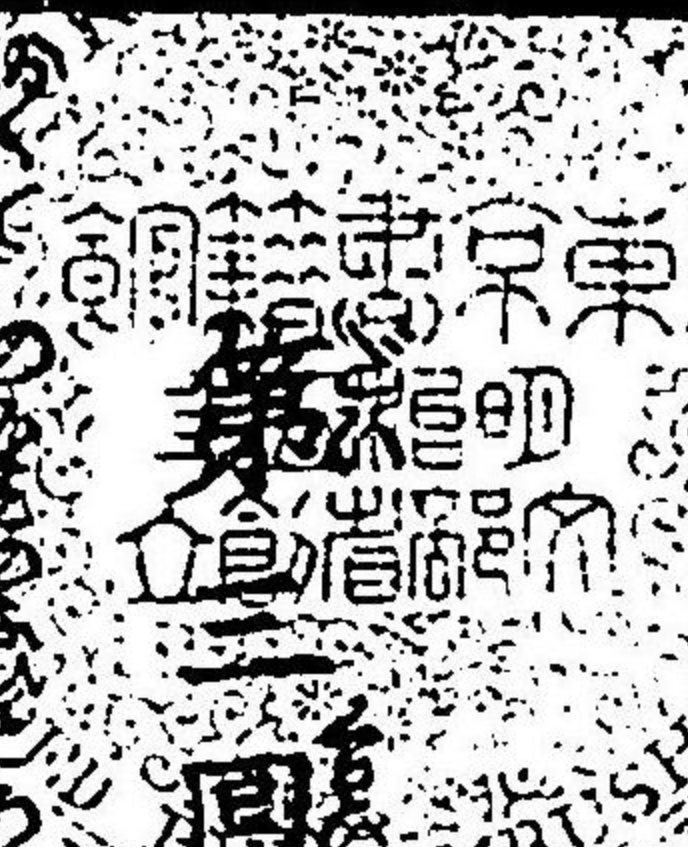
平定...

漸死

開卷驚奇俠客傳第一集卷之二

明治二十二年

東都 曲亭主人編次



東都 曲亭主人編次  
明察不誇りて鼠輩恥辱を被は

却說野上史著演の後門前小立出く小六九對面し在客門を急と急と  
英直が柵と宿所迎客れて且客房は處を登時母屋小六九も俱に柵の後方小跟  
て。躬て客房小赴く程小著演の妻晚稻のさく凶服の更々。這所小俟て母屋  
小六九對面して哀戚の涙を拭ひぬき遠く他郷の旅宿して父を喪ひ良人の後  
を悼み然りと正首の舒く勤王慰れ母屋のゆゑ小六九も必おまゝ主人夫  
婦の佳丁寧る款待能く且感し且ち歎かば姑も心もぬせ及敷母の母  
絶るあどるの磯傷る音と共久後まの親子のうへを瀕しけ候程小著

東都傳第一集卷二

五堂印



進みたる用ひられたる母屋の今宵も極を成りて明きとては若者演説の頭をち梅のあし  
 月のあたる病中より睡じける疲勞のあつた俺們夫婦も任と息子を俱に這次の間へ  
 快退せし就寝の臥草も儲てあつた母屋の推入とそを辱けられたる非難は夜更  
 睡らざとも一生涯の別れはなほさう疲勞を數ふを固辞むと晚締も共言諒の言さる  
 さへ然るまゝ他人の任のあつた俺們夫婦も任と息子を俱に這次の間へ  
 増て病後後の憂ひなごせんとてなごつて愛さるる子の為はなほさう疲勞の言さる  
 とも程の小六の初め就寝の快々休らひぬれと夫婦齊一論なる言親切きけれ  
 母屋の意見の推辭難し小六と共信の告別も退せし枕の就寝かけの然程は小六の  
 睡らんとするはなほさう疲勞の言さるる野上の公翁の言さるるはなほさう  
 言さるる悲しみの親の主君と息子を俱に這次の間へ首級由比の濱邊の鳥居の

あり大鳥の腹も肥わさる痛まされ俺假名川の宿に在り一時那旅客の噂もや  
 六日己前のものなけれは首級今も那濱邊の宿に在り一時那旅客の噂もや  
 志我れ継ぎ做るあつたのそは俺假名川の宿に在り一時那旅客の噂もや  
 來つる轎夫の問試と鎌倉路を粗末の這首と距ると遠くもあつた鳥夜とては  
 や嗚呼介さると肚裏のあつた決めり快きも甲夜の程の外見もあつた便の宜し  
 く時を程とせ既わく人定の母屋の疲勞れ熱睡のあつた台の上の間も主人の妻の  
 早も夢えけり小六の折をさうけられ横横遣る身と起り枕邊の措かる小六の合と腰の  
 跨へ燈火をさう滅しと搔撈りさう潜ひかき縁頼る遣戸の末半用は庭口より後  
 門のさう赴く奴婢の甲夜の遠くはなほさう紛れもあつた半用は庭口より後  
 けれ密と推用してさう五月の天の輝き降るもさう定もあつた如法闇夜に





修善傳第一轉卷二

卷三

有條第四



小六

由比濱小六奪首級  
其のちりゆり

大正十一年一月一日

五

山田正太郎

行半やう瀆邊の石を膽を打と吐嗟とふる叫びの志小むの程めらむば又一人の利  
 多と捕て引造らんと肩引搦て投るの間に許怪痛む己が合する桿棒を頭拂  
 苦と叫ぶ声の汀渚の友衛ある傍に仰て沙石を塗れと拵れる先に進一一個の乞  
 見の今の輝の光景は駭怕れ度と失ひて逃んとまると小六九のゆると途を跟入て内  
 りくさる刃の刃かとい見の首を斬り落され軀の後倒れる。後一程の件の武士は投  
 惱され兩個の目見の苦痛を必身と起し組んと進む件の武士は又推南左右  
 兩個の目首拵林を探返し復投居し推東の目首拵の上藤折布で動きを以て  
 刃を授けざる小六九の位と走りよるとける。件の武士は抗て這首官の  
 志の快も然と推林ある好意の一言主と誰とある浪の可せと返と真沙路の  
 迹を埋めて鉄びと述る間も磯松原の樹の際を潜れ故来一方かか身早目の雨催ひ  
 有はる螢のえをさると雲の絶間を渡。星の路の宿跡を映りては星を葉の露を

然程小六九の好むも別ぬ暗に夜も余信と走る。稍踰越まて来ふは時暗踊  
 る。竹筒簫の音猛然と吹暢しく首級を捕見し逃ると馬の諸声騒しく土兵  
 幾人歎き少く蕉火振照しと軒を既火急小六九は形勢をさうのめぐるあり。虎は  
 腮を逃れても蟒の口をさうせはつとあを狗死せ右少将のか首級とさう復さうのま  
 りと母の歎の痛す。猶且恩人野上の翁と連係せざるこある。仇もと報ふ  
 似る。今と追兵も近着ぬとも又只時運を天任せ。脱さんもの。母思と心  
 なるの急げも投る往方の野干玉の鳥夜やあれが警者の杖。離れしを信と見て  
 歩の運び果敢とぬ後。逼は雑兵們の目光めける。十の電光脚談ふと呼やと  
 捷を捷せ身と論しく閃りと避る小六九の一期の危窮心迷ひて。前首小川の  
 身を覚む。登時追捕の雑兵も軒推方。耶と声を被て復捷つ十手を小六九は背  
 受て快走る勢い白と転さ如く。これあむと件の小川へ忽地水と陥る。吐嗟と叫ぶ



声と共に愕然とて、驚き覚め、是る南柯の夢ぞのけり。小六丸の覺ての後の胸うち  
 騒ぐ安らぬ心と鎮の頭を撞て、彼此とさうさう身も、甲夜の夜に母の側臥する  
 はゞと思惟すか、俺豫より右少將の首級心の心ゆき、大尊以取らむと、さういふ  
 とるふ轎夫は、鎌倉路と同一まゝの、そとに垣吉の為め、比初旬の身夜を、潜  
 ぶ便利よりの、不知案内の夜行する、準備も、不覚お出で、過失ゆ  
 本意は、遠慮の、這身は、其処を、得る、おぼれ、果は、  
 必寝の、勞頭、よして、任ま、奇く、夢、  
 け、那武士と誰と、知し、  
 死の、觸躰一萬餘級と、取合、  
 右少將の、首級と、隠さんと、欲する、同氣、同身、俺、  
 俺意中、と告ぐ、首級、  
 後見、  
 果敢、

明々地々の譚ひ、  
 御音、  
 寝て、  
 向く、  
 視れ、  
 きたれ、  
 九の、  
 男ける、  
 合、





今も七年未用敗たる先筆をそののれはもが言ひたるは曲曲の文字を爲せ  
 檢遣三葉ののれはもが言ひたるは曲曲の文字を爲せ  
 塚を遣はさんとの所爲のせんむ唐の僧懷素のその年来の敗筆を瘞せ瘞せ  
 筆塚といふ。載る唐国史補ののれはもが言ひたるは曲曲の文字を爲せ  
 下ぞと説示其道俗存一感佩と舊を疎きて新を親利のまを今この世の  
 敗る筆を瘞せ瘞せ本を瘞せ瘞せ心標の有るごとくを瘞せ瘞せ連の稱へくこぼりこぼり  
 九の秘策を知れ痛痛く思ひ及ぶ著演の陰徳情義の感激と今も  
 後折るは是の思慮を復たせられ人の子と生れる甲斐あるとを思ひ及ぶ既  
 英直の棺の這時其墓果の吊送の衆人の先づ退るもの後れて友を俟のもの  
 小六九の著演の又傳せられて更彌比野上の宿所の還りける是よりと小六九の母  
 親と共侶の喪を筆居く一室を出る口の過七をまゝ遊行寺の註の著演の

亦教を廢して兄弟の忌服を受た。這時藤白棚九郎安同の鎌倉の宅地を賜り家  
 作落成の日そのごとく程後せんあつたののれはもが言ひたるは曲曲の文字を爲せ  
 身の管領の館舎を出仕と。稍八九日と歴る程小齋由比の濱の鼻の脇屋  
 義隆王後の首級の第六日及ぶ夜一箇を送る給失を由縁ののれ埋もる竊  
 取る欲と風声の安同れをちせく。肚裏の事なす件の義隆王後の俺忠節めく  
 敷を捕まわらせるとのれはもが言ひたるは曲曲の文字を爲せ  
 偷兒の竊小新田首級奴然然の那殘當る。智術ののれ犯人を擯捕まわ  
 らるるののれ上の御威の預り出頭を提徑する便りののれ密にその物色探る  
 程の人のと報の。當國藤澤南御の御土野上史著演と喚做そののれ他を名  
 たは俠者の。皇衣陣殺の觸腰一萬級を購集めて其ののれをのれを  
 つねに好財を散と里人の貧窮を救ふとある。大父の新田義貞の從ひて兵糧を

尚より義貞討れて世に憤りの職を辞し退隱して鎌倉殿義隆の出仕せよと子の孫相續て今の著演の至まるに最傲慢たるものなれども先代頼朝の時より由緒ある著家あるものにて弁針を加えられたることを信誼をも推量するに脇屋義隆王後の首級を竊取するの那著演が所為のあらざるを敵の虚実を知らずしるゝ屬路に類して安同の勢が大なるをりて退き尋思と做さるる備の職を成らぬが首級盗賊の著演のあらざるは沙汰ねたの仕方と許へりて然るに時且過る他人の功を奪はれて後悔其処ならずやん所詮他が宿所不到の威を權を實と吐く。折矢庭の捕捕て鎌倉を牽りておは是則俺の功の職分を奪はるゝ亦何人執非を呼ぶと吐裏計較既決りけれ次の日氣賀へ休息の暇に常時稟請下十四五名の役者も前後の立馬をせめて直氣賀へいりて且藤澤の御前赴き著演の宿所を呼門せし鎌倉殿の御内人藤白柳九郎安同の同試みせしめてあつて後向あつる主人の對面

まゝとぞの母ける且と著演の老僕某甲もと答へり。偶光暗のよと来るといへども著演のあつる日兄弟の喪の筆をくく日ありては三日とせしは三日の目見参入のやうのやういふとせし果て安同の眼も腫ら声も立ちて亦自由の至りて縦喪中在るがれ俺私に事ある鎌倉殿の御用を承りし會はるゝとあり異議ありが推薦の項髪扱て牽出さん然るものも辞するやと教團曰茶々黒言獄其老僕の怖れて退き却著演の徳々たるもの随報に著演阿容る氣色もる。著演の且客房へ案内せし茶を薦め俺今出て對面せしとせし老僕もる。あつて形のどくが欺待せし安同のまもてとせし客房の上座を坐せし著演の出くまも今秋と俟程の著演の凶服の尽かすの飾りも寒暖を舒来意を問は安同の元音の後者四五名後方から権威を示し高きお俺發向別議ありて南方の落人たる脇屋義隆主役六名前月廿四日の

夜底倉を誅せられたる首級を由比の濱に梟られ第六日及び夜その首送るま紛  
 失のほまあるふ和殿の虚名を好まむ敵自方の差別ゆるく年来彼此陣取  
 のれ鬪體を集めてこれを甚まり且私恩を施し故多く人の東西を取をその身と共父祖  
 三世職を辞し御士と倡へ官府を蔑如せり加之祖父著佐新田義貞の仇を  
 徴かき書せりとの舊縁を今忘れ武家を自らと蓋く忌憚らざる進止既なく隠れ  
 るくを御聆り連うられを以推せたり那義隆主従の首級を當夜竊取り甚り  
 欲隠せり欲めん疑ひ和殿あり討むを向らるる前代鎌倉の幕下以降由緒ある  
 御士多きものとまそのゆはは及れ志御留義隆主従を討捕てまを安同とを擇  
 出され則密使お立られて穿撃の為ある入彼盜賊の外多ふ世評和殿極うを  
 陳れがとく免され逆徒の首級を隠せり是則逆罪多兵們多著演の未を被  
 と呼ば後者們的河と答を寄んとす著演の書を位と脱令人人陳恩とす

其何等の罪ありや且のよと林も安同うち對ひて趣その意思は如何  
 證據小那首級を隠せり其が野為とすや譬義隆主従の首級を其が隠せ  
 とこの今あるのてめん口を受くをまのい況況素より知るると罪あるれんを  
 のれ安同性起り噫憚りた盜賊する逆徒の首級を何の罪の多んや身許  
 るると教團けども著演驍が冷笑ひく原来御邊の武門の故実を感とて捷  
 んと著知事詳説示さし這方へ找してゆめ大約敵の大將の首実檢あり故実あり  
 又その首を軍門の梟らるる日限あり既に三日と過ると或の首級を本國遣し或る  
 その邊の寺に甚き古例と然るもの南朝の建武三年曆元夏五月横津洲湊  
 河の役楠贈正三位近衛中将正成卿一家を盡し陣歿せし時等持院尊氏  
 卿の沙汰とて廻身首三日の後これ河内へ遣とる子正行朝臣贈ありたの後  
 又南朝の貞元元年曆元七月二日の戦新田贈中納言義貞卿越前足

左 けつての降のり  
借虎威頼九郎普野上  
備城門小六九  
右 ちや洞のま



有原第五



金龍寺 當初上州 金山城内 あり

羽の植嶋の田畔に流矢の中より一矢足利尾張守高經に首級を呈し上  
せし尊身氏卿の沙汰とて則身首首目の後又その首級を齋齋と越路入遣一玉に  
高經の御奉仕とて義貞卿の軀共首級と同國長崎の驛を稱念寺の墓にて  
墓を建松を栽菌阿白道和尚と導師とと當時の法師と源光院とを  
けは又その本國上野とて義貞卿の三男左少將義宗朝臣我山紹碩禪師を屈  
請とて墓を執行し更ふ又法名と金龍寺殿真山良悟大禪定門とを  
金山の城中に一個寺を建立して寺號と金龍寺と呼ばれたる先蹤總てか  
いへば名將の正法とてせらるる。非如正法の罪せらるるも身首と三首の後亦その  
首の有無を問はれ律由られぬのまければ義隆の首級を身首首目と三首の  
紛失の詮議もも既而三首を歴くし有無を問はれ又同宗の敵とて國  
賊ありはれれば必れを身首首目とて先祖と辱るるに怖る故もは然れを六日

まで那主後の首級を身首とて依の措とて只是有司の意に執先例の違ひ  
候れば首級を隠せし所の為とせらるる。今に至りては外に被るる候  
らひあはれぬ身首の穿敷金の上の密証ありて必御邊の臆度を出る人を証  
利を謀り似非穿敷金あるを然るに猶然るに其鎌倉召よせて問はる  
該處の何人ゆの憚り密使とて首首たたりんや快き音見お後ひ退去  
還し申せ異議及ぶ共侶の鎌倉へ参上とて訟すると虚実を糾さ快く返答  
られと席を拍膝を打ち問かへたは義理明辨の辱めらるる安同の黄葉と  
故の啞見の如くそれとてなる面報やふ眼を睜れ一句も出さばむと給  
笑ひて刀を引搥て身を起し口功者多長談を辯火をて水ぬい做はる  
恁々と云ふはばとて必れ申し出候に候に兵們來と呼ばるる席産障も  
外面ちと出くも著演の送りもせむ冷笑ひ袖ち拂て軀と奥も退す



第四回

陰徳老境入る奴婢を得たり  
陽ト鬪鶏の縁主僕を倡ふ

倭り一程小六丸も母親母屋も奥の客房のふら當で猛の駈けは  
 訝りく奴婢の問ひより那藤白安同が密使と唱へるまゝ胸の安  
 その次の間へ近づき親子存一竊せせ安同がいつるも又著演が女  
 一五二十の詳み知られくと愉快くあつた後出果りのあつた  
 ども著演の後まも母子の對ひ安同がまゝの言の便のな  
 母屋のゆゑ小六丸も亦著演の件の下も同の果を已むのあつた  
 この日藤白安同が回を初り認りうを敷きくほし心づきの備り  
 雙の主役多人敷の庵小腕をもて敷の毛を吹はれ未ぬ禍主人  
 同敷のまも老腕ひるものるぬる不死の程あつた其時と俟あ

兼大章  
 兼相撰  
 兼道法  
 兼是則  
 兼義隆の  
 兼り

兼清幼婦  
 兼和信  
 兼様  
 兼そのま  
 兼のま  
 兼のま  
 兼のま

胸を捺りて母親母屋と共信おきくも同窺うそは終奥へ退はる重子れ  
 思慮を遅しけれ却説三伏の夏過て秋の初風立ちよの候とる英直が卒  
 忌を迎へけりあの日野上著演の母屋小六丸を推りて遊行寺の詣り丁寧の好事と  
 執の衆徒の布施と且英直の墓を建及義隆主後の首級を瘞る所  
 中五層の石塔波を造り羊毛阜塔の四文字を鑄り羊毛阜の二字を義  
 隆の字の半體で有けるを規のるをを曉る筆塚きりといひけり  
 中六小六丸の筆塚きりといひける羊毛阜の三字を悟る後お至る字向に  
 進む随意發明とて後漢の蔡邕が曹娥の古碑の題たる黄絹幼婦  
 外甥其垂白の隱語の類する楊柳の才を知らずと選りといひける後  
 るる古の次第の識まの法廷果一の夜女著演のまもを曉示  
 側のおきそは依母屋と小六丸を招近づけて杖のり知らるるごは俺們夫婦を過

世々くくあの年来子どもいともあつたればいとも愛ひり多し人として後世に第一の孝  
 と先祖の祀を絶所以の介ふよひにきくも個義任とてよりの宿望をなく成  
 まて死するとも後安らあのかげと知るの今より小六を養嗣として休庵園を譲  
 へば一然れごとく野上氏を月一実の親の祀を絶せんとのあめをせぬ養嗣を  
 もその本姓を錦氏を告ぐ両家といふ合野上氏累世の諸霊を附祭せられたる  
 こと其大の幸いよの義と兼引ゆべしといふ晩稲の共侶か世人の妻と一子  
 るたて去のひとと十稔以来幾遍り側室を薦めたりいふ色と好まぬ用ひ  
 られぬが術の多く心苦くいふおそろきほどの怪品のあふ来るとその家習を續せんと  
 ある俺使のう備これの優るとあらんや俺身過世の罪障もよりのあやなく輕ら  
 らげ後安くゆるべし必る推辞めいととられて敬篤く小六九の母の應のおぼつるの具  
 口と鉗と母屋のこれとちびやうなるよもあは日其陰の這見と然れどもあはれらるる。

願ひの心はつたに福をばれども尚老朽なるは夫婦なるわがの後はともか子達に  
 生れぬぬとあはれぬ又十稔も守りぬとの音おえ嗣のるるその折あつたとも  
 かも仰れ随ひはつて人今尚早なるは且く緩いぬと推辞むを著演の義に謙  
 退辞譲の人あはるべしもの義の今宵と起して云ふこのあはれぬるは俺既に錦生の  
 柩に對ひて推言ひのあはれぬる。然れども俺嗣をせしむるを數ひのあはれぬるを辭せし  
 むく怨むれ母屋の困りと答難しと小六九の然れどもとあはれぬる小藤を杖と主人主  
 婦に對ひてのあはれぬる尚総角あつたてつては徳の打出の杖に似てんやと嗚呼ま  
 むくあはれぬるの知りぬれは言ひつては重恩の厚さうへあはれぬるの幾い  
 むくあはれぬるの奴婢おせられて使うるの素より願ひ所おぼる況やん嗣をせしむるは這身の  
 福とあはれぬる何とぞ數ふ推辞むる然れぬ人の子と奉るあはれぬるの五十五  
 足る人の子を養ひぬる早のあはれぬる且俺們的世の憐れよとあはれぬる教養の精なる名家

瑕瑾あるらん母の辞退の故の。その由も果ぬ著演の頭を左右うち掉くとも  
 亦愚意と相違する在昔魯國の公冶長の縹緲の中在つると孔子の言を  
 教ひぬむその罪あらざること。その兄の子を以妻せ玉ひとの本文あり和殿母子は世が  
 憚るの時運のまゝもその罪あらざること。俺親の嗣かきせんや。然しその  
 義を嫌むる目今心と聴まほし推辞の要るるを。運の護りどけられぬ  
 母屋のあらへ小六丸も竟に脱るること。僅かその意の後ひし。著演斜るに於て  
 介人のけりありし。小六丸は俺嗣と忌園の日平ととの執びを表まべし。既小御士の  
 嗣のまのつれ丸と吸ひ上相心ひかむ。小六丸の丸を除く。第小六とのいふとよけれ丸の  
 笑人の謙稱あり。みづから下才との入るごと。才かごと訓め對へ。却丸との入るとの  
 義をあらぬのへ。と諭せば母屋も小六丸もよは優る著演の博學多才の感服  
 するもの亦その意の随ひけり。却説その冬著演も小六が忌園の嗣に比吉日とト孟

まる小六と父子の義を結び又親戚と累入りし。生品置酒茶會し。執びを盡しけり。是れ  
 よりして著演の小六が為の師と擇む。文と學と武と習ふ。著演の時より。家の  
 藏書のまのつれ丸が小六と讀書の初より。日毎に数千言を吟誦して。あつその義理小  
 通達し。まの切瑳琢磨して。螢雪の窓の小夜の深を。數の武藝も亦世の高  
 係上自武者助金刺秀武が京師より來る。鎌倉の僑居せし師と隨ひ。その  
 餘は水巻法坐敷の相撲の技まの。その師小就く。米習得むと。あつ。著  
 演よく執び。恩愛実子の異なる。又只の著演のまの。晩稻の小六と著  
 演。且母屋の隔る。相親して妹のど。姉の優て。馮。萬事か。ひられ。母  
 屋とのほも謙遜りて。日々の女婢們と共に。働む。小六も亦実母を  
 父母の分別せむ。あつ。を用以。孝を盡し。稟。恩。答。日。の。有  
 官。小六が。文學。武藝。習ひ。上。建。年。を。是。の。後。

とも併べぐつ知識との同話休題現陰徳を陽報の積善の家餘慶をたの  
む。その次の年の春より晩稲の月水も漸々身あがり。冬に至りて安ら  
う男児を産む。時著演の五十歳晩稲の四十二歳の初産産む。母  
さ子さ快肥立ち乳も亦豊なり。けりけり園宅の狭いへうもの  
は稱へる年来作善陰徳の報いさうんとゆめも。當時の奇談か  
五十日百日の産室養ひ果一比母屋を小六と商量して有日野上  
夫婦の小六を養嗣せんと宣せ折辞ひまう。世の人の子と奉る  
あれは姑く等せぬ。功徳積むる八十萬の神の恵まきぬ。男  
又そのお家督を嗣。願ふ小六を初の子復任品。母は心  
心を休らぬ。奴家ういひな。小六の只願願ひ。

声もあがり。又沙汰の限り。俺年五十及び。今の子の成長を  
又命あう。緩命の長くと。それ迄死なぬ。既小俺庄園を  
六の譲んと約束せし。今何人。赤子。小  
六が弟。成長が家僕。家支の次男助。因てその乳を  
婢之助と喚ぶ。と告げ。事情を知らぬ。人の子を養へ。この  
團の晩稲。慰め。任真の理。過世。人の子を養へ。この  
氣。邂逅の子を生む。世話。小六を養へ。この  
備果。小六を養嗣。意見の生れ。然し。約束  
易。小六を今。又義任。俗。水の上。泡。云云と辞。俺夫の意。著演。彼。母屋。林

晩稻が曾の俺と同。俺心の巖の如し。左ても右ても轉るる。これらの一と小六の  
 身詳め傳示して然るに妄念を絶せし復のれ必忠んたるものと教言をく。美引  
 登くもゆづりげと母屋の回を辭ゆる。言美一の退はく。小六ふより報知らせ大人も  
 亦母刀自由箇様々々の宣へん今ゆらぬせん。此のふ小六と嘆嘆しく野上氏を  
 冒らむとも身一介の功もきて人の家督を續んり。と素より願ふ所ゆら  
 況今の養父母正に実子あるの。猶且その意の後。後に至る人必奪ひ取り  
 と多ぶく禍も又是より發らん。胸安くぬるやれども事情を按はる。目今急小這  
 議め及ぶ怨を受く。洪恩を空に做せとありやせん。五年十年俟とも俺們が  
 這志の果一がらほのゆらぬと。黙して折を俟ん。とのを母屋の感嘆しく親恥  
 また你の了箇。そまふ優るとま。然りとく養父母を隔く。疎畧ふあゆら  
 あり付まざる。領を。そのさるるゆら。須弥より高に恩人を親せむ。子あり

むとも。この疎畧のあはれを。致せ骨を折る。報んとて。思ひなれ。その長かある  
 安らふ。母屋との感。其の果つ。介後。又這一議を。いふ。むとも  
 野上の赤子の心を盡し。介抱。下日。由解らむ。愛はる。この大なる。を著演  
 屋林。ゆき。總々。小六。同。強裸。も。懸布。の。奴婢。之助。と。名。つけ。る。  
 然程。母屋。の。量。其。直。の。病。中。死。後。の。苦。勞。患。難。今。の。野。上。の。資。助。を。と。  
 世渡り。や。ま。似。し。む。も。然。と。人。の。懸。り。を。れ。胸。苦。し。の。か。た。あ。む。は。は  
 所以。ゆ。月。毎。積。の。病。の。用。れ。る。遂。に。病。の。り。一。血。色。も。初。め。似。全。身  
 いく。骨。立。た。な。を。小。六。と。愛。ら。む。ひ。て。連。年。の。諫。め。く。餌。茶。と。薦。を。野。上。夫  
 婦。も。幾。遍。と。か。く。醫。師。あ。せ。ん。と。い。う。病。臥。ま。し。母。屋。を。辞。ひ。て。從。む。  
 獨。心。の。あ。ら。う。亡。夫。の。送。言。の。郎。君。の。あ。ん。年。の。十。五。六。か。の。あ。ん。時。あ。ま。素。生。を  
 告。ま。あ。ら。う。先。君。の。預。り。ま。る。と。三。種。を。通。す。一。ま。あ。ら。う。と。あ。ら。う。の。折。を





有様第六

五七〇



四九七

かしらねのりや  
 錢下巻前開  
 鶏示凶吉  
 相砂とまふ

九一

ありて自ら方當國に在るを領主上杉憲定の執事なる長尾景賢が  
 報に景賢が大軍を推寄り攻めんとす。是時防戦あり。自ら方と  
 士卒もあつたが各ある家臣の戦没。妻子眷屬四落八散。生死も知らず。數  
 做されて残燼もび燃る。自ら方の辛く重田を殺脱。當國  
 弥彦山より登り且く山居を程小料ら異人。仙書一卷を授  
 けられ且隱形五道の内中水火二道の仙術を折傳授せし。是は自ら  
 方主の食されとも饑む。山に在ると一稔可介。後越後と去り本國を  
 上野小針に深く潛む。御座せし。永十年の夏四月下旬脇屋右少將義  
 隆の相摸る。底倉あり。敷かれ。以下京鎌倉の下知と。自ら方の隱  
 名を嚴め索ねよと。州郡は徇知する。骨相書とせし。又上野を  
 落着せし。と遠く。信濃甲斐なる由縁許或一年或半年潛む。

光陰を送り。其居も討兵を患られ。危なる。那仙術の奇特も。火の値  
 火の隠れ水の遇。水に隠れ。虎口を脱れ。是の。後宿所を定め。東八ヶ国を徧歴  
 する。會秘日の恥。雪めんと欲す。是時。後ひま。忠義の志。相ら  
 げり。譜第恩顧の勇臣。畑六郎二時種。あり。他。新田の四天王。隨一人と  
 える。畑六郎左衛門尉時能。孫の武藝。勇力。大父時能。筋力。飽  
 ま。悍く。千鈞の鬪。揚げ。自ら方主と共。侶。幾。遍。と。危。難。を。脱  
 する。主。後。二人。ある。影の。肢體。從。正。首。仕。然。陸。奥。と。落。ぬ  
 一。千。稔。の。光。陰。を。經。屋。永。十。七。年。の。夏。の。比。下。総。千。葉。介。兼。胤。鎌  
 倉の。音。領。を。竊。然。る。隱。謀。の。企。あ。り。と。世。の。風。声。の。彼。此。自。方  
 主。從。相。執。び。千。葉。介。下。総。の。舊。家。へ。千。葉。葛。飭。印。幡。數。郡。の。領。主。を。これ  
 の。三。あ。む。と。相。馬。武。石。大。須。賀。國。分。原。馬。加。の。氏。族。ヲ。他。今。謀。叛。の。旗。を。揚。ぐ。



千葉の城は有筆の一朝の落つるは且その先代は葉宗胤の嫡先大父贈中納言  
 言卿の弟従ひまゝつて三井寺合戦の折陣没となり宗胤の弟貞胤は北国落つる自方  
 ありし先大父の亡のい後いさぎも引返して尊氏に従ひし然れ宗胤の嫡子胤貞は  
 始終忠義の志持まゝ征西將軍の宮内少輔入御下向の上供奉しまつて大隅守に任  
 せられ肥前國を領したり是等の舊記由縁のあらぬ竊に那地へ赴きその為体と雖も  
 世の風声の虚実を知るべく其外便宜とあるは然りとて猛可なり起り行装を  
 整正て笠をさして立出ぬ六郎二時種は奴隸の姿に打扮して裳を引折脚絆を穿し一  
 刀と腰刀として行果を馳ひて外見と潜り主従二人後に従ひ先か立て下総に投てき  
 程の年の年漆月の下院に千葉の城下の程遠くぬ福草村まで来ぬひり畢竟自方  
 主と這頭と過りの折又甚麻なる話説りあるぞと次の巻の解分はを聴ねり。

用卷敬馬奇俠客傳第一集卷之二終

122
95
15



